

学校の詩

うた



学校の教育目標

自律貢献

文責：教頭 藤田天平

◆3学期が始まりました

皆様、新年明けましておめでとうございます。今年も御陵中学校教職員一同、力を合わせてお子様の健やかな成長に尽力して参りますので、本校の教育活動にご理解とご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、1月11日（火）から3学期が始まりました。始業式では、藤井 浩彦校長から次のような話がありました。（一部要約 詳細につきましては御陵中HP「校長のひとりごと」をご覧ください）

皆さんは「成功の方程式」という言葉を知っていますか。これは京セラやKDDIなどの創業者である稲盛 和夫さんの言葉です。

稲盛さんは『人生の結果＝考え方×熱意×能力』であると言っています。

「能力」とは、例えば体力に恵まれているなどといった先天的、つまり生まれもったものです。

「熱意」とは、「こうありたい」「こうしたい」などの強い思いや願いです。この熱意には0から100まであります。

例えば能力が低い人でも、熱意が高ければ、かけ算で良い人生となりますし、能力が高くて、その能力におごってしまい、熱意が低ければ、結果的には良い人生にはならないということです。

そして「考え方」とは「どういう心構えで勉強や部活動、仕事に臨むか」です。この考え方にはマイナス100から100まであり、他者に対する嫉妬やねたみといったネガティブな考え方（マイナス100）から、前向きや素直といったポジティブな考え方（100）までとなります。

稲盛さんは『目標を達成したい、成し遂げたいと考え、強い熱意をもって前向きに、粘り強く取り組み、多少能力が低かった人でも必ず成功する』と言っています。結局は自分次第ということなのです。2学期の終業式でも話しましたが、目標に対して「非」なのか「未」なのかで大きく変わります。「絶対に達成する」という気持ちをもって取り組んでほしいと思います。

最後に、オミクロン株が流行しています。感染対策をしっかりと行いましょう。何よりも健康が一番です。皆さんが3学期もいきいきと輝いて素敵な姿を見せてくれることを期待しています。



また、始業式後の生徒集会で生徒会長の高村 蒼さんが、「無事にみんなで始業式を迎えられてうれしく思います。オミクロン株が流行っていますので、手洗いやうがいを忘れずにしましょう。また、冬休み気分の人もあるかもしれませんが、メリハリをつけて、3学期を充実したものにしていきましょう。特に3年生は本格的な受験シーズンを迎えます。私たち1・2年生は3年生のことを応援しています。」と話してくれました。

昔から1月は「行く」、2月は「逃げる」、3月は「去る」と言われています。3学期はあっという間に過ぎていきますが、それぞれの学年が次のステップに向けての良い準備期間となるように教育活動を進めて参ります。

◆募集しています。『ランドセルクラブ小中交流事業生徒ボランティア』

大野城市教育委員会では、小学生の放課後の学習の場として「ランドセルクラブ」を実施しています。その中で、体験活動の一環として中学生との交流事業を計画しています。

そこで、本校の生徒のみなさんに、後輩である小学生との関わりを深めるため、ボランティアを募集しています。詳細につきましては、1月11日配付のプリントをご参照ください。

なお、申込書は17日（月）までに担任の先生に提出してください。たくさんの参加をお待ちしております。

事前打合せ	多目的室にて	2月 2日（水）	15：30
実施日	大野北小学校	2月16日（水）	16：00～16：45
	御笠の森小学校	2月21日（月）	16：00～16：45



「虫の目 鳥の目 魚の目」



【教頭コラム】

「きょうはきのうに、きのうはあすに」

1995年（平成7年）1月17日は阪神・淡路大震災が起こった日です・・・。
今年で27年目になります。時間のはやさを感じるとともに、人として忘れてはならないことをあらためて考えてみたいと思います。

新年は、死んだ人をしのぶためにある。
心が優しいものが先に死ぬのはなぜか、
おのれだけが生き残っているのはなぜかを問うためだ。

大みそかに、いつもこの詩を思い出す。中桐雅夫の「きのうはあすに」である。詩を思い出し、阪神大震災の記録を、また読み返してみる。これまでに分かっているだけで、死者は6308人におよぶ。

夫も妻も、下敷きになった。手を握りあって助けを待った。夫の声が聞こえた。
「おれは駄目かもしれへん。子どもたちを頼むー」「いい人がいたら一緒になれよー。三途の川を渡るなよー。」救助されたが夫は死亡。41歳。

がれきの山の中から、3歳の娘の泣きじゃくる声がした。かぶさるように、「パパがもうすぐ助けるよ。」と、33歳の父親の声がした。救助活動をしていた人が、娘を抱きかかえる父の姿を、すき間から確認した。やがて父親の声が絶えた。娘も、病院に運ばれる途中、亡くなった。

最初の揺れが去ったあと、いくつもの地区が、火に包まれた。73歳の父親が、下半身ががれきに挟まれていた。子どもたちは両手を思いきり引っ張った。炎が迫った。父親は穏やかに言った。「もう行け、もう行け。」

かわいがっていた孫を失った81歳の女性は、以来、持病の薬を飲まなくなった。孫の葬儀後、急速に衰弱した。「足手まといになっても悪いな。」ともらした。
地震のあと、半月足らずで、孫のあとを追った。

だれもが心優しい人たちだった。果てしない記録を読み、そして亡くなった人たちのために自分はなにをしたか、自分になにができるかと問うてみる。

きょうはきのうに、きのうはあすになる、
どんな小さなことでも、目の前のものを愛したくなる、
でなければ、どうしてこの一年を生きてゆける？

朝日新聞 「天声人語」より

今の中学生が生まれるずいぶん前にこの阪神・淡路大震災は起こりました。当然彼らはこの出来事を知らない世代ということになります。

おそらく17日はニュースなどで当時の映像が流れるだろうと思いますが、その数は年々減ってきているように感じています。しかし、被災された方々にとってみれば、何年経とうが絶対に忘れられない出来事だと思います。だからこそ、わたしたち大人は、このような出来事を通して、命の尊さや日常のありがたさ、人の優しさなどを決して忘れてはいけないということを、次の世代に伝えていかなくてもならないのではないかと考えています。そうでなければ、東日本大震災も熊本地震も過去の出来事として忘れられてしまうのではないのでしょうか。

◆お知らせ

1月に入り、新型コロナウイルスの感染者が再び増え始めています。感染症予防対策につきましては、学校でも再度徹底していきます。ご家庭におかれましても「うがい」「手洗い」「喚起」「密を避ける行動」を、お子様にご指導くださいますようお願いいたします。

感染症拡大防止に
ご協力ください

